

2014. 10. 30 (木)

怒りと哀しみのわかちあい

堀江有里

はじめに

おはようございます。今日はチャペルアワーにお招きいただいたことを感謝します。

少し自己紹介をしておきます。わたしは、1994年に日本基督教団の牧師になり、そのころから「信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会（ECQA）」という、キリスト教のなかでのセクシュアル・マイノリティにかかわる活動を、レスビアン（女性同性愛者）当事者として続けてきました。いまは社会学部で講義を担当しているとおり、専門は社会学ですが、研究や大学の講義を担当している期間より長い間、牧師をやってきました。

また、1994年からセクシュアル・マイノリティのピア・サポートや相談業務に携わり、ここ数年間は生活困窮のなかにおかれている人たちの生活相談、心の病や障がいと共に生きている人たちの支援などの相談業務にもかかわっています。

出会いのなかから

今日は、セクシュアル・マイノリティ支援の活動のなかで出会った、忘れられない出来事についてご紹介します。

ある集まりで、一人の青年に出会いました。それは出会いというよりは、「出会い直し」と表現したほうが適切かもしれません。仮にAくんとしておきましょう。Aくんは、女性の身体をもって生まれました。そして、その後、自分が「女性ではない」ことに気づき、いわゆるホルモン療法——男性ホルモンを体内に摂取——をして、普段は「男性」として生きるようになった人です。「性同一性障害」という言葉で知られることが、最近は多くなりました。

ちなみに付け加えておきますと、「性同一性障害」というのは、身体の性別と自分の性自認（性別の自己認識）が一致しない人につけられた「単位疾患名（病名）」です。1990年代には「トランスジェンダー」という言葉のほうが、権利を要求していく社会運動では使われていました。「性別越境」と訳したら、わかりやすいでしょうか。いつしか、当事者が使っていた名前よりも、医療のなかでつくられてきた「病名」が社会のなかでより広く、多くの人たちに認識されて行く。これは日本に特徴的なことでもあります。マイノリティにどのようなまなざしが向けられているのかが、よくわかる現象でもあります。つまり、マイノリティを「わたしたち（＝マジョリティ）」とは異なる人たちとして括り出

し、他者として認識する振舞がそこにはみられると思います。多くの人たちにとって、それは無意識なものであるからこそ、問題として認識されにくいのですが。

さて、A くん話に戻ります。先ほど、出会い直しというふうに言いましたが、実は、わたしは、彼とは何度も何度も対話を重ねてきた間柄です。わたしが初めて彼と出会ったのは、相談業務のなかでした。そこで何度も対話をしてきました。それはあくまでも、相談者（被支援者）であるA ちゃんと相談員（支援者）であるわたしとのあいだで交わされる対話だったのです。そして、共通の友だちを介して、わたしは彼と出会い直しをしました。それは、相談者と相談員、つまり、支援者と被支援者という関係ではなく、あらたな関係が生まれて行く瞬間でもありました。だからこそ、「出会い直し」と表現したわけです。

この出会い直しは、わたしにとって、彼との相談業務のなかでの対話を思い出させてくれるものでした。彼は、たとえば、電話相談でもあまり話をする人ではありませんでした。

ある日のこと、声で何となくいつもの人だと思ったわけですが、電話を取ったら向こうは無言です。A 君かなと、思うわけです。「もしもし」ともう一回言ったら、「A です」という名前が確かに聞こえてきました。その時、彼は入院していたので、どんな様子かなと思って、お互いに無言で受話器を持っていました。「今、どこ？」って聞きましたら、彼は少し間を置いて「病院」と言うのです。かすかな音は聞こえます。夜中の1時ごろだったと思いますが、とても静かな夜でした。言葉少なにやりとりをするなか、ヒタヒ

タという音が聞こえました。歩いているのかもしれないと思い、「どこ？」とたずねると「廊下」という声が返ってきます。かすかな音で推測して、ポツポツとお互いに対話をする。そんなことが何度か繰り返されていました。

「死にたい」と言い続けていた、そして時には菓を多く飲むことによって病院に救急搬送されたりもしていた彼が、いま、目の前にいて、笑顔をたずさえている——わたしは、その出会い直しするとき、我慢していた涙が止まらなくなってしまいました。そして、わたしは泣きながら、彼に一番言いたかったことを伝えました。「良かった、生きてくれて」、と、これはとても単純な話です。お互いに生きているから、いのちがあるから、会えるのです。ごく当たり前のことですがけれども、改めてそんなことを確認した時間でした。

彼は、その後、日常のなかで自分が生き延びてきた道筋を思いながら、ほかの人たちの支援をしたり、自分の生活する地域で、少しずつ動き始めました。セクシュアル・マイノリティが生きやすい日常の場をつくっていくために、役所への交渉をしたり、図書館に本をリクエストしたり、ということ積み重ねています。つまりは、自分の身近なところから社会を変えて行こうとしています。そして、わたしは彼のそのような積み重ねに、大きな励ましをもらっているわけです。

支援の相互関係

対人支援の仕事や活動をしていると、自分のことを「サポートする側」だと思ってしまふことがあります。また、それに慣れてしま

うことがあります。わたしの場合は、牧師であつたり、相談員であつたり、という立場です。しかし、実際には、支援の現場で出会った人たちに支えられることは少なくはありません。その点について、20年ほど痛感してきました。もちろん、大学においても同じようなことがあります。わたしは非常勤講師という不安定なパート教員で生計を立てていますが、教壇に立つ人間は、専門的な知識を提供することが役割のひとつです。しかし、視点や感覚は人それぞれちがう。パート教員として、いくつもの大学に赴くなか、学生たちからあらたな視点に気づかされたり、また励まされたり、力をもらったりすることもあります。

今日は「怒りと悲しみの分かちあい」というタイトルをつけました。マイノリティの側から物事を見ていくこと。わたし自身が、日々、相談支援の現場でも、研究のなかでも考えていることです。

例えば、すごく良心的なマジョリティの学生さんたちが、こんなことを言うことがあります。「セクシュアル・マイノリティのために何かをしてあげたい」、と。自分に出来ることを、手助けをしてあげたい。その発想自体は、善意から来ているものでしょう。しかし、ここで立ち止まってみたいと思います。何かをして「あげる」とは、なかなか曲者でもあります。いったい、どこに立った視点なのでしょうか。

これまで相談支援の現場でも、また大学の学生たちと向き合う場でも、わたしはそういう人たちには、なぜ、して「あげたい」のかをたずねてきました。返ってくる言葉は「誰かの役に立ちたい」というこたえが圧倒的に多いです。だからこそ、マイノリティのため

に、わざわざ何かをしようという話なのですから。しかし、残念ながら、そのように声をかけてくれる人たちに、わたしがセクシュアル・マイノリティのグループを紹介することは、ほとんどありません。誰かに何かをして「あげたい」人たち自身が、自分自身、どのような困難と向き合っているのか——その点と向き合う必要があると思っているからです。誰かの「ために」という視点は、多くの場合、その人自身のイメージのなかでつくられたマイノリティ像をもってしまっています。実際に、マジョリティの人たちがセクシュアル・マイノリティのコミュニティにやってきて、自分が描いていたイメージと異なった人たちに出会い、そこでそれまで大切に育まれてきた場を壊してしまうことは、しばしば生じることでもあるからです。

では、「何かをしてあげる」ことを棄却することで、わたしたちは他にどのように動くことができるのでしょうか。わたしは、まず、一緒に怒り、悲しむこと、そこに止まること、が必要だと思っています。セクシュアル・マイノリティに限らずですが、マイノリティは無力な人なのではなく、力を奪われている状態にあることが多くあります。社会の価値観がマジョリティのためにつくられてきたからです。だからこそ、奪われている状態に対し、怒ることや、哀しむこと、という感覚を取り戻すことが必要だと思っています。そして、善意のマジョリティの人たちには、そのなかで、なぜ、怒りや哀しみが生まれてくるのかを一緒に考えて行くこと、感じて行くことが必要だと思います。というのも、まさに怒りや哀しみという感情が生まれてくる、そのただなかにこそ、社会の理不尽さがつまっているのであり、マジョリティの価値

観が誰かを抑圧し、排除し、差別していることに気づききっかけにもなるからです。

怒りや哀しみを共有していくこと、そして無力化された状況から回復していくこと、そのプロセスに、まさに笑いや喜びという感情も生まれてくるし、また共有することもできていくのだと思います。支援をする／されるという関係だけではなく、日常のなかで怒り、哀しみ、いまある社会の状況を把握して行くことが、まず大切なのではないでしょうか。

「マリアの讃歌」にみる逆転の発想

先ほど、聖書を読んでいただきました。「マリアの讃歌」（ルカ福音書 1: 46～56）の部分です。クリスマス前に読まれることの多い箇所です。イエスの母マリアが結婚せぬままに妊娠し、非常に戸惑ったという物語をルカ福音書の著者は記しています。その戸惑いと不安のなかで、マリアはこの讃歌を語っているという位置づけがされています。

この「マリアの讃歌」は、ルカ福音書が描かれた共同体が共有していた思いを示しているともいえます。ここには、よく読んでみると、とても怖いことが書いてあります。「主はその主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」と、力を持っているという自覚を持っていない人たちに対して、呪い

のようにも解釈できるような言葉たちが並んでいるわけです。

世の中の価値観とは異なる価値観が、ここにはあると思います。まるで呪いのようにも読める言葉の背景にあるのは、非常に大きな怒り、そして哀しみなのではないか。そして、言葉として残されてきたことが示しているのは、そのような怒りや哀しみを共有していく人びとの群れが、ルカの共同体のなかにはあったのではないか、ということです。

怒りや哀しみという感情は、ネガティブな感情です。それはあまり積極的に支持されることの少ない感情かもしれません。しかし、このようなネガティブな感情を、笑いや喜びというポジティブな感情に転換していくためには、まず、ネガティブな感情が生まれてくる出来事につながり向き合っていくことが大事なのではないでしょうか。異なる立場の人びとと支え合いながら、お互いにどのような歩みを進めていくのかという対話を、怒りや哀しみのなかから見つけることができれば、と、わたし自身は願っています。

[付記] 本文はプライバシーへの配慮を鑑み、チャペルアワーでの話をもとに再構成を行いました。ご紹介した活動については以下の拙著でも触れていますので、ご参照いただければ幸いです。『「レズビアン」という生き方—キリスト教の異性愛主義を問う』（新教出版社、2006年）、『レズビアン・アイデンティティ』（洛北出版、2015年近刊）。

（社会学部講師）